

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 13 日現在

機関番号：15201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22720289

研究課題名(和文) 前方後円墳成立期の青銅器生産とその製作技術系統

研究課題名(英文) Production and Fabrication method of Bronze Implements in the Term when Keyhole-shaped mounded tomb appeared

研究代表者

岩本 崇 (Iwamoto, Takashi)

島根大学・法文学部・准教授

研究者番号：90514290

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円、(間接経費) 810,000円

研究成果の概要(和文)：日本列島では、古墳時代に各種の青銅器が墳墓に副葬された。本研究では、多様な古墳出土の各種青銅器が、いかなる技術によって製作されたのかを、製品に残された製作痕跡から具体的に明らかにした。また、同じ古墳時代の青銅器であっても、製作技術にみる特徴には共通点だけではなく、相違点があることをも確認した。とくに、青銅器への製作姿勢のあり方から技術系統的に整理し、同時期の青銅器製作にも技術的な異同がみられることを指摘した。さらに、各器物が指向する意匠にみる特質もふまえることで、古墳時代の青銅器には等質的な存在意義が社会によって付与されたのではなく、器物に応じて多様な社会的役割があったことを説明した。

研究成果の概要(英文)：In the Japanese Islands, various bronze implement was buried in the grave in the Kofun period. First, in this research, various kinds of various bronze implement of the ancient tomb excavation showed clearly by what kind of technology it is manufactured. And even if it was the bronze implement of the same time, it checked that there were not only a common feature but various differences in the fabrication method. Furthermore, from there being a difference in a design, it is thought that there were various social roles in the bronze implement in Kofun period.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：古墳時代 前方後円墳 青銅器 製作技術 鋳造

1. 研究開始当初の背景

古墳時代のはじまり、すなわち前方後円墳出現期に確認できる青銅器には、銅鏡・銅鏃・銅釧・筒形銅器・巴形銅器など一定数の類例をもつものがあり、それらに加えてごくわずかに類例の少ない特殊な青銅器が出土している。しかしながら、この時期の青銅器生産の実態については、不明な点が多いというのが実情である。これは、ひとえに当該時期の青銅器生産にかかわる工房跡や鋳型などの具体的な資料がみいだされていない点が大きく影響している。ただ、そうした状況下においても、いくつかの品目については系統的な整理が試みられている。

銅鏡については、日本列島で製作されたと判断できる倭鏡、それとは系統の異なる漢・三国鏡という系統的な差にもとづく枠組みが古くより認識され、近年は研究の進展により、その識別の精度が高められている。ただし、銅鏡の系統識別に際しては、目につきやすい文様が基準となっており、製作技術はほとんどとりあげられていない。

また、銅鏃については、弥生時代と古墳時代の銅鏃が技術的にみて連続性のあるものと指摘されているにとどまる。

さらに申請者も、銅鏡をはじめ、筒形銅器や巴形銅器の製作技術について復元案を示し、それぞれについて技術的な特徴を整理したことがある。とくに筒形銅器と巴形銅器とでは、技術系統的にみて大きな差異がある可能性を見通した。

以上のように、古墳出土の青銅器の技術系統にかかわる研究については、

個別の品目ごとの研究が中心であり、しかも特定の品目に偏る傾向が強い、

製作技術の復元的な検討については低調であり、今後は検討が不可欠である、

古墳出土の青銅器にたいして、複数の生産系統の存在を想定できるようになりつつあるが、その背景について具体的な検討はおこなわれていない、というのが現状である。

個別品目の製作技術にかんしては、先行研究においてもごく一部の出土例のみで全体の製作技術として位置づける場合があり、再検討の必要性が残されている。

以上にみた研究の背景から、本研究ではあくまでも古墳時代における鋳造技術の復元を第一の目的とする。多様な青銅器が具体的にいかなる技術によって生み出されたのかを明らかにすることを研究の基盤としつつ、技術の導入と維持について考察を試みたい。

2. 研究の目的

日本列島では、古墳時代においてさまざまな青銅器が墳墓に副葬された。そうした青銅器には、列島内で生産されたものもあれば、対外交渉によってもたらされたものも存在し、生産から流通さらには消費(副葬)に至る過程はじつに多様であったと考えられる。本研究の眼目の第一は、古墳出土の各種の

青銅器が、いかなる製作技術によるものかという復元的な検討を試みることである。第二として、各種の青銅器が製作技術系統からみてどのような関係性を有するのか、さらにそうした系統の違いがいかなる背景に基づくものであるのかを分析する。第三として、上記の検討をふまえて、古墳時代の日本列島における青銅器生産体制の成立契機について考えたい。そのうえで、原始・古代日本社会における技術の導入と維持にかんして一つのモデルを提示し、該期の時代性の一端を探ることをめざす。

3. 研究の方法

本研究では、上述の研究目的を遂行するために、具体的には以下の研究を実施する。

古墳出土青銅器の製作技術 すでに述べたように、古墳出土の各種の青銅器については、製作にかかわる工房や、工房の存在を想定させる鋳型などがいまだ未見であるため、具体的な製作状況については不明な点が多い。しかしながら、各種の青銅器には、製作にかかわるさまざまな痕跡が残存しており、丹念に観察をおこなうことで、青銅器の製作工程である、鋳型製作 鋳造 整形

研磨という4つの工程の内容を相当程度まで復元できる。まずは、観察に基づいて、各種痕跡を総合的に整理することで、製作技術の復元的検討を進める。

古墳出土青銅器の製作技術系統 古墳出土青銅器の製作にかかわる4つの工程にみる特徴を、各種の青銅器のあいだで比較することで、それぞれの系統的な位置づけを検討する。検討に際して重視したいのは、製作技術の異同である。ただし、異なる品目の製作技術に相違が存在するのは当然であるため、とくに製作姿勢や製作に対する原理にまで踏み込むことによって、製作技術系統を整理し、古墳出土の青銅器の実態把握をめざす。

前方後円墳成立期の青銅器生産 日本列島における古墳時代の青銅器生産がいかなるものであったのかについては、明らかとなっていない点があまりに多い。古墳時代に先行する弥生時代においては、青銅器の製作工房や鋳型が出土しており、古墳時代の青銅器製作技術との異同については検討可能である。まずは、弥生時代の青銅器生産とのつながりがみとめられるのかどうか、みとめられるのであればそれはいかなる特徴を有するのかを検討する。また、古墳時代と同時期の中国大陸や朝鮮半島にも固有の青銅器が確認されているので、それらとの比較をおこない、古墳時代における日本列島の青銅器の技術的な源流に迫る。さらに、列島においても複数の生産主体が存在したのかどうかについても検討する。

さらに、製作技術系統という観点から、日本列島の青銅器生産を古代東アジア社会のなかでの位置づけを模索する。すなわち、古墳時代の青銅器生産技術がいかなる文化背

景のもとに成立したのかという点について、社会変動をふまえて考察する。とくに、技術の導入と維持が具体的にどのようにおこなわれたのかを明らかにし、東アジアの他地域の状況と比較することで、日本列島における前方後円墳成立期の青銅器生産の特質と、そうした生産体制を生み出した時代性を探る。

4. 研究成果

日本列島では、古墳時代にさまざまな青銅器が墳墓に副葬された。

本研究ではまず、そうした多様な古墳出土の各種の青銅器が、いかなる技術によって製作されたものであるのかを、製品に残された製作の痕跡から具体的に明らかにした。具体的には、銅鏡・筒形銅器・巴型銅器・銅釧を検討の対象として、それらの個別品目の青銅器の製作技術を復元することを試みた。検討の結果、鋳型構造や鋳型への割付など鋳型の製作状況、製品の表面状態から仕上げの研磨技術や鋳造欠陥が生じたメカニズムなどを解明した。

そして、同じ古墳時代の青銅器であっても、その製作技術にみる特徴には共通点だけでなく、さまざまな相違点があることを確認した。製作上のリスク低減など、青銅器への製作姿勢のあり方から技術系統的な整理をおこない、同時期の青銅器製作においても、技術的な異同がみられることを指摘した。

さらに、こうした製作技術とともに、各器物が指向する意匠にみる特質もふまえることで、古墳時代の青銅器には等質的な存在意義が社会によって付与されたのではなく、器物に応じて多様な社会的役割があったことを説明した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計13件)

岩本崇、青銅器の製作技術からみた芝ヶ原古墳出土銅鏡の意義、芝ヶ原古墳発掘調査・整備報告書、査読無、城陽市埋蔵文化財調査報告書第68集、2014、46-49

岩本崇、青銅器の有する意味とは、考古学研究会60周年記念誌 考古学研究60の論点、査読有、2014、31-32

岩本崇、銅鏡副葬と山陰の後・終末期古墳、文堂古墳、査読無、2014、135-161頁

岩本崇、三角縁神獸鏡 鏡の分布が示すヤマト王権と西日本の勢力関係、歴史読本、査読無、第58巻第12号、2013、104-109

岩本崇、さまざまな青銅器、古墳時代の考古学、査読無、4副葬品の型式と編年、2013、72-84

岩本崇、古墳出土巴形銅器の製作技術、技術と交流の考古学、査読無、2013、158-171

岩本崇、播磨地域の前期古墳と集団・社会構造、前期古墳からみた播磨、査読無、2013、

31-60

岩本崇、三角縁神獸鏡編年研究の現状と課題、月刊考古学ジャーナル、査読無、635、2012、20-24

岩本崇、角田徳幸、山陰、古墳時代研究の現状と課題、査読無、上、2012、37-58

岩本崇、2011、木村定三コレクション 大阪府万年寺山古墳出土三角縁神獸鏡、木村定三コレクション研究紀要、査読有、2011年度、2011、7-24

岩本崇、島根県益田市四塚山古墳群出土の三角縁神獸鏡と「同範鏡」、島根大学法文学部紀要社会文化論集、査読無、第7号、2011、11-26

岩本崇、三角縁神獸鏡と古墳の出現・展開、日本考古学協会 2010 年度兵庫大会 研究発表資料集、査読無、2010、115-130

岩本崇、三角縁神獸鏡の仿製鏡、遠古登攀 遠山昭登君追悼考古学論集、査読無、2010、145-162

[学会発表](計14件)

岩本崇、山陰の古墳と青銅鏡 プロローグ、島根大学公開講座「考古学・歴史学からみた先史・古代の出雲」、2014.3.8、松江市スティックビル

岩本崇、日本海沿岸部における古墳の出現・展開と石見地域、平成25年度島根県埋蔵文化財センター講演会 庵寺古墳群と日本海交流-石見東部の古墳時代前期、2013.11.16、大田市立仁摩公民館

岩本崇、北近畿・山陰地方における古墳の出現、2013年度博古研究会総会・研究発表大会、2013.11.2、出雲弥生の森博物館

岩本崇、「同範鏡」と三角縁神獸鏡、邪馬台国の謎に迫る 卑弥呼の鏡とその周辺』特別展記念講演会、2012.11.4、徳島県徳島市・徳島市立考古資料館

岩本崇、茶すり山王と古墳築造の意義、特別展「王者の帰還-茶すり山王のすべて-」記念講演会、2012.6.24、兵庫県朝来市・和田山ジュピターホール

岩本崇、島根県益田市四塚山古墳群出土の三角縁神獸鏡と「同範鏡」 山陰における古墳出現の一樣相、第12回社会文化学科研究交流会、2012.3.22、島根大学法文学部

岩本崇、播磨地域の前期古墳と社会構造、第13回播磨考古学研究集会、2012.2.5、姫路市教育会館

岩本崇、古墳の出現・終焉と『出雲』、平成23年度島根大学ミュージアム市民講座第2ステージ 続・考古学・歴史学が語る 先史・古代の『出雲』、2011.11.12、松江市スティックビル

岩本崇、弥生・古墳時代の地域と集団 出雲地域を中心に、平成22年度島根大学ミュージアム市民講座・第2ステージ考古学・歴史学が語る先史・古代の『出雲』、2011.1.22、松江市スティックビル

岩本崇、武器からみた茶すり山古墳、特別

展 - 茶すり山古墳 - 巨大円墳に眠る但馬の王 - 講演会、2010.11.13、兵庫県立考古博物館

岩本崇、但馬の古墳と鏡、平成 22 年度兵庫県生活文化大学、兵庫県芸術文化協会 2010.11.12、兵庫県神戸市兵庫県立ひょうご女性交流館

岩本崇、鏡にうつされた動物図像、平成 22 年度荒神谷博物館講演会、2010.10.23、荒神谷博物館

岩本崇、三角縁神獣鏡と古墳の出現・展開、日本考古学協会 2010 年度大会、2010.10.17、播磨町中央公民館大ホール

岩本崇、古墳出現期の地域と地域間関係、2010 年 5 月考古学研究会岡山例会、2010.5.8 「岡山大学文化科学系総合研究棟 2 階共同研究室

〔図書〕(計 7 件)

川畑純、初村武寛、岩本崇、阪口英毅、魚津知克、奈良国立博物館、五條猫塚古墳の研究本文編、2014、約 300 頁

森下章司、檀本誠一、岩本崇、橋本英将、土屋隆史、大手前大学史学研究所、文堂古墳、2014、約 300 頁

小泉裕司、下垣仁志、岩本崇、長友朋子、岸本直文、城陽市教育委員会、芝ヶ原古墳発掘調査・整備報告書、2014、約 120 頁

桐山秀穂、寺前直人、岩本崇、財団法人古代学協会、雲宮遺跡・長岡京左京六条二坊跡発掘調査報告書、2013、全 242 頁

高田健一、岩本崇、普段寺古墳群調査団、普段寺古墳群、2012、全 16 頁

高田健一、岩本崇、普段寺古墳群調査団、普段寺古墳群、2011、全 20 頁

中井正幸、鈴木元、高田康成、岩本崇、川畑純、大垣市教育委員会市史編纂室、大垣市史第 9 巻 考古編、2011、全 923 頁(分担部分 703-926)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
<http://www.arch.shimane-u.ac.jp>

6. 研究組織

(1) 研究代表者
岩本 崇 (IWAMOTO, Takashi)
島根大学・法文学部・准教授
研究者番号：9051429

(2) 研究分担者
()

研究者番号：

(3) 連携研究者
()

研究者番号：